女子と時代病

新渡戸稲造氏談

▲危險なる思想　時代思潮の著しい變遷に連れて近來一部の女子の間には、一種危險なる思想が流行して來たやうに思はれる、現に先頃も某雜誌に出た婦人の書いた小説が、此の危險な破壞思想を含んで居た爲めに、治安を妨害するものとして發賣を禁止されたさうであるがさう云ふ危險な破壞思想――デカダン思想が、世の若い婦人の心を占有して、家庭の破壞者を多く出すやうになつたならば、夫れこそ實に怖る可きものと云はなければならない、若しも之が時代の傾向であるからと云つて、打棄て置いたならば、其の害毒は如何なる程度にまで及ぼすか測り知れないのであるから、當局者並びに教育家は、一日も早く此の思想の撲滅に盡さなければならない。

▲學者の責任　元來斯ういふ思想が流行するやうになつたのは、近世科學の著しい發達――夫れも極めて一方に偏した科學の發達に依るものであるが、今の學者も之には大いに與つて罪があらうと思ふ、といふのは現今日本に於て、學者間に尊重されて居るのは、皆獨逸の學説で、科學でも教育でも、總べて獨逸の其等に依らなければならないやうは思はれて居る、偶ま英國君しくは米國の教育でも唱道する者があるならば、其事が既に一種の罪惡でもあるかのやうに考へられて居る、然らば斯樣に日本で尊ばれて居る獨逸本國の近頃の社會狀態は、何んな風であるかと云ふに、道德問題などに就いて云へば、佛蘭西などよりも尚一層頽敗して居る風があつて、男女關係の如きは、最も墮落を極めて居るのである、左樣いふ國の思潮を歡び迎へ而も一方に偏した科學主義を重んじて教育を施す結果は、遂に斯ういふ危險な破壞的思想が婦人の間に迄も流行するやうになつたのではあるまいか、此の點に於て私は今の學者等に其の責の一半を歸するのである。

▲常識の缺乏　次に常識の缺乏と云ふ事が、此の思想の流行を大いに助長して居る、西洋に於ても

勿論斯ういふ危險な思想の流行した時代はあつたのであるけれど、常識が發達して居る爲めに、其の弊害は餘程救はれた、所が今日の日本では、此の大切の常識が甚しく缺けて居る、殊に女子に於て然うである、學校の教育を見ても、中學程度迄は常識の修養と云ふ事が多少行はれて居るやうであるが、夫れ以上になると殆んど全く常識の修養が無い、之は甚だ危險で、一朝破壞主義や虛無主義が流行するやうな事があれば、忽ち其の時代病に感染して仕舞ふ怖れがある、であるから此の危險な思想を防止しやうと思ふならば、教育家たる者は、大いに常識の養成に努めなければならぬのである。

▲感情の教育　常識の修養と共に最も大切なのは感情の教育である、今日の教育を見るのに、此の大切な感情の教育が全く無視されて居るのは、甚だ遺憾に思ふ、感情を無視した教育を以て、何うして完全な人を作る事が出來やう、頭だけ發達した知識ある人を作る事は出來るかも知れないが、人としての全き情を有つた者は到底作ることは出來ない、曾て私が感情の教育と云ふ事を論じた時に大いに非難した人もありましたが、私は感情を全く無視して完全な教育が行へるものではないと信じて居る、今日の教育では感情と云ふものを非常に卑しんで、感情を制する事のみを教へて居るが、感情其れ自身は、決して卑む可きものでも惡むべきものでもない、故に制すと云ふよりは寧ろ感情を美しく清くするやうに教へる事が必要である、即ち教師は心を以て生徒の心を迎へるやうにしなければならない、所が今日の女學校の教育を見るのに、此點が全く忘れられて居るやうだ、試みに女學校の生徒を捕へて、學校で教はる課目の内で、何が最も面白くないかと尋ねると、殆んど十人が十人迄、皆修身が一番面白くないと云ふ、何故面白くないかと聞くと「校長先生は何時も分り切つた事ばかりお仰る」とか「大人に云ふやうな事ばかりをお話になる」といふ、成る程教師が修身の教科書を擴げて其の云ふ言葉には、熱もなければ情もなく、只暗記的に修身を講義した所で、生徒に取つては一向面白からう筈もなければ、又

何等の印象も與へないのは當然の事である、況してや修身を講義する自分に道德的信念が堅固でなくて、何うして生徒の心を動かす事が出來やう、此の點からしても感情の敎育と云ふ事は、最も必要である、敎育は單に知識のみを與へるのが其の目的ではなく、一面に於ては感情を清くし人をして暖かき心を懷かせるのが、其の貴む可き働きである。

▲宗敎の必要　最後に私は現代の人に宗敎心の無いといふ事が、斯かる危險な破壞思想に陷り易い一の原因であると思ふ故に敢て基督敎とのみ云はなくても、私は現代の青年に是非宗敎を勸めたい而うして宗敎の力に依つて、斯かる危險な思想を撲滅したいと思つて居る。

西洋の小兒と日本の小兒

高島平三郎氏談

日本の家庭と外國の家庭との小兒の取扱ひ方の相違は家庭の成立の違ひに基く、卽ち其國、其の國民性の如何に由るのであるから利害得失を論ずると範圍が廣くなる。差し當り西洋と東洋の最も著しい相違點を擧れば大體に於て西洋には一體の社會組織が個人主義を標準とするから家庭にも亦個人主義が行亘つて居る。

それであるから親が子に對する態度は東洋人の目には殘酷であると思はれるほど獨立させてある。第一に我國では生れた時から母の懷に抱かれて寢るが西洋では特別な場合は知らず平常は湯たんぽなどを入れてやつて別の寢床へ寢かせる。成長後も添寢をすることなぞはなく幾等泣いても乳とか食物とかを與へた後は一定の時間がくれば必ずベットの中へ入れる此點は日本人より見れば殘酷に思はれるがやがて獨立的にすべての事を自分でやる習慣がつく基となる。

も少し成長した後は小兒の玩具箱なども皆鍵があつて小兒が十歲位になれば皆ポケットの中に鍵を持つて居て人に手をつけさせぬ又事實手のつけられぬやうになつてゐる。